

松村通信第特別号

2023年4月8日

松村勝弘

ロッキーズ

多士済々 ロッキーズ、立命館大学経営大学院第六期生の同級生の皆さんの集まりがあるというので、参加を申し込みました。楽しみです。この期の皆さんはたいへん活発で、仲が良かった。確か2011年度入学生だった。うち、大森君とは2年目の課題研究論文でも指導をしたので、ひときわ思い出が深い。年長の福田さん以下、ほんとに多彩であった。一人一人を挙げて思い出を語り出したらきりが無い。

2011年度の「経営財務」を担当したのが皆さんとの出会いであったと思う。毎回の講義終了後は梅田近辺で飲み会をしたのではなかったか。飲み会を終えて新快速で京都に戻ったがお付き合いしてもらったのも懐かしい。そして今日までお付き合いが続いている。人間関係とは奇縁なものだ。

企業力指数 私は人間関係を大事にする方だが、経済学では人間が機械的で面白くない。その点、経営学は人間が正面に出てくる。だが私の担当していた「経営財務」という科目は人間が後方に退いている感がある。そして数字数字である。でも、私の「経営財務」はできる限り人間を正面に据えて考えようとした。会社とはヒトからなっている。それが一番表に出てくるのは、あまり嬉しくない話だが、会社が倒産するときだろう。サラリーマンたるもの、それを避けるために、というかボーナスに響くと言うことで苦心惨憺している。「経営財務」で「企業力指数」を講義したのを思い出す。皆さんの一番の関心事でもある妥当と思って、この話をしたものである。きっと懐かしく思い出されることであろう。

人間関係 直近の「松村通信」でも、人間関係についてあれこれ書いている。ところが、経済学では、モデル的経済人を研究対象としている。新古典派経済学では、人間は合理的な経済人であるという前提でモデルを構築す

る。マルクス経済学でも、対象は範疇的資本かと範疇的労働者である。生身の人間が対象とされていない。だからしっくりこない。もちろん、それはそれでいろんな事を明らかにしてはいる。経営学は人間そのものが、とりわけ不合理な存在であるとして、それを研究対象としている。さすが経済学でも、行動経済学なども人間を不合理な存在と考え始めている。

とりわけ、社会学や社会心理学ではそういう人間を研究対象としている。新古典派経済学の本場、アメリカでも、社会学は生身の人間を対象に研究を進めている。だから面白い。

パットナム ロバート・D・パットナム、柴内康文訳『孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生』（柏書房、2006年）は、翻訳で全巻689頁と大部であるが、一読をお勧めしたい。そして言う。「仕事探しに精を出すものがよく使う戦略の一つは『コネ作り』であるが、それはほとんどの人間が、何を知っているかではなく、誰を知っているかということによって職を見つけるからである。すなわちそれは社会関係資本であって、人的資本ではない。経済社会学者のロナルド・パートは、回転式名刺入（ローロデックス）が膨らんでいる管理職ほど、昇進が早いことを見いだした。しかし社会関係資本[ソーシャル・キャピタル]の見返りは経済的なものにとどまらない。友人関係を研究する社会学者のクロード・S・フィッシャーはこう述べている。『社会的ネットワークは、われわれの人生のあらゆる点で重要である。仕事探しではしばしばそうであるが、援助の手や仲間、そして寄りかかって泣く肩を見つけるために重要なことはさらに多い』。」(15-16頁)まさに、MBAとはそういう友人作りの場でもある。しかも、「一般的互酬性によって特徴づけられた社会は、不信渦巻く社会よりも効率が良い」(17頁)ともいう。MBAで学んだことを会社に持ち帰ってそれを経験されていることである

う。

社会関係資本 ウェイン・ベーカー、中島豊
訳『ソーシャル・キャピタル ― 人と組織の
間にある「見えざる資産」を活用する ― 』

(ダイヤモンド社、2001年)は、タイトルその
ものがソーシャル・キャピタル、すなわち社
会関係資本となっている。そして言う。「個人主義の神話が何と言おうとも、ソーシャル・キャピタルは個人的およびビジネスでの成功、さらには幸福で充実した人生を手にするために必要不可欠である」(5頁)と、きわめてストレートである。しかも私益追求のためにそれを手に入れたわけではない。「ネットワークづくりのゴールは他人に貢献することである」(105頁)といている。私もそうありたいと思っている。

個人主義の行きづまり このような社会学の
業績は、これもよい本であるが、ロバート・

ベラー他著・島菌進・中村圭志訳『心の習慣
アメリカ個人主義のゆくえ』(みすず書房、
1991年)で明快に述べられている。すなわち、
「私たちが主に批判しているのはある種の個人主義であることがおわかりいただけると思う。すなわち、個人は社会から切り離された絶対的な地位をもつとする功利的個人主義と表現的個人主義である。

それに代わって私たちが支持するのは、社会に根を下ろした倫理的個人主義である。個人と共同体が支えあい強化しあうようなあり方である。」(vi頁)

個人主義の対極にあるのは、集団主義である。あるいは、コミュニティを大切に考える考え方である。日本人にとって、おなじみであるが、これを「甘え」と捉える人もいる。そうではなく、集団主義が戦後日本の経済成長を支えてきたことは間違いない。西欧でも個人主義の行きづまりは意識されてきている。

コーポレート・ガバナンスと関連して 数年来私がコーポレート・ガバナンス論を展開してきたことはご存じのとおりである。「グループや個人間の情報の非対称性が拡大すると、取引における監査の必要性が高まり、より多額の取引費用を要することになる」(稲葉陽二編著『ソーシャル・キャピタルの潜在力』^{せんざいりよく}日本評論社、2008年、176頁)といわれている。

これはまさに、人間不信の極致であると考えてる。西欧でこれが行き詰まっているという認識は彼ら自身が感じていることである。社会学者はこれに敏感に反応している。

ファイナンス論では、株主と経営者の間に情報格差があり、株主が監視しないと経営者は私益を追求しがちであるので、株主は経営者を監視しなければならないと考える。まさにガバナンスである。個人主義者は私益第一に考えるのが当然だと信じている。

そして上に引用したとおり、ガバナンスのためのコストが大きくなる。近年のコーポレート・ガバナンスの諸制度が日本企業のコスト上昇、それに伴う経済の停滞の原因ではないかというのが私の考えているところである。西欧で個人主義が行き詰まってきているのは間違いない。日本がその後を追ってどうするのか。私はそう思っている。しかし、これが世界の潮流になっている。世界の現在は、標準を作り上げ、それをすべての国に使わせる。それが公平な競争だと考える。しかしそれは、言い出したほうが得をする。先にデファクト・スタンダードを作り上げ、それを世界に押し広げようとするという潮流が世界をめぐっている。ハードの軍事力が世界を牛耳るのは、いまや困難である。そこでソフト・パワーで世界を牛耳ろうとする。それが現代の西欧である。自分たちの弱さを知っているので、それを逆手に取るしたたかさがある。

日本の会計基準 会計における標準化もそうである。大日方隆『日本の会計基準』(中央経済社、2023年)は、会計の世界で何が起きているかを教えてくれる。時間があればお読み頂ければと思う。全三巻、各巻400頁を超える大部の著書である。近年におけるアメリカとヨーロッパの間でのソフト・パワーをめぐる覇権争いが垣間見られる。これの紹介は後日にゆずることにする。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。

皆様のご意見を歓迎します。HP
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>)もご覧下さい。
フェイスブックもやっています。また、メールで意見
交換しましょう。メールをよこして下さい
(matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。